学びの風便り

リーディングスクール通信８　　R5.9.15

発行：松本市教育委員会　教育研修センター

特集！学びの改革のあゆみ　波田小学校・波田中学校

波田小学校　「多様な子どもを包み込む学校づくり」を目指して

波田小学校は、昨年度、市教育委員会と連携し、働き方改革プロジェクトに取組み、その様子を２月に「働き方改革フォーラム　波田小学校の働き方改革に学ぶ」という形で県内外に発信しました。保護者や地域の方々の理解のもと年度途中の日課変更により、低学年は２時２５分、中高学年は３時１５分の下校を実現し、空いた時間を「子どもの学びに生かす時間」「職員間のコミュニケーションを豊かにする時間」として利用してきました。

今年度は、学びの改革パイオニア校の指定を受け、児童の気持ちに寄り添い、その子の「今」に適した学びの継続を考えていくために、「子ども理解からの授業改善」を目指しています。学校に伺い、研究主任藤巻先生、染川教頭先生、研修主任清沢先生、働き方改革推進メンバー上村先生に、１学期の歩みを振り返り、お話をお聴きしました。

学年教科会で語り合う先生方

子ども理解から授業改善へ

■日課変更により教師に物理的な時間ができたので、子どもたちに還元していかなくてはと思っています。「子ども理解」を深めるために全職員が、担当クラスの「一人一人の子どものよさ」をまとめ、校長先生・教頭先生に見てもらっています。前回は５月に出し、今回は９月に提出することになっています。自分で「この子のよさは何なのかな」とよく見ようとし、子どもの理解が深まる機会となり役立っています。その子のよさを生かした子ども理解からの授業づくりを願い、２週間に一回、教科に特化した「学年教科会」を開催しています。若い先生方が多い学校なので、授業づくりや板書の仕方や単元の進め方などについて語り合う貴重な時間となっています。

職員室にいる時間が増え、コミュニケーションが活性化し、「子ども理解」も深まる

■多様な子どもを受容するには、「今までと同じことをやっていたらダメです」と、日頃から校長先生が言われていることが徐々に浸透し「こういうふうに考えてみました」とか「こうしたいけどいいですか」などと提案してくる先生方が増えました。お互い職員室にいる時間が増えたので、自然と子どもたちの様子を話す機会が増えました。「Ａちゃん、こんなこともできるようになってきたよ」などの声もよく聞かれ、先生たちが「つながる」ことで情報が「つながり」子どもたちが「つながる」という感じがしています。

■「子ども理解」と「職員間のコミュニケーションの活性化」を目指し研修を担当しています。研修に主体的に参加できるように学年や係が研修を担当し、難聴のお子さんへの対応や非違行為防止研修など、プレゼン等を用意し実施しています。また、放課後の時間があるので、日頃から他学年の先生とも話し「昨年はこうやっていたんだ」と知ることができ有難いです。７月の初旬に、他学年の先生方と３～４人のグループになり、１学期の学級や授業を振り返り、困ったことや悩みを共有し、今後の学級経営、授業づくりに生かす「波田トーク」を企画しました。「高学年の教室掲示はこんなにステキなんだ」「あの子には、こんな対応をすればよかったのかな」などと参考になることが多く勉強になりました。（次ページに続く）

■改めて「時間がある」ことは有難いと思っています。明日の準備ができるし、学年の先生方とも今後の進め方等について検討することもできます。自分はもっと「本丸の授業改善をしっかりやっていかないと」と思っています。教科担任制をやっているので、担任と担当する子どもたちの様子について語り子ども理解に役立てたり、子どもの姿をもとに教材を考え修正し授業づくりできたりするのが嬉しいです。

波田中学校　「明日も学びに行きたくなる学校」を目指して

学びの改革パイオニア校の指定を受け、「授業の充実」「小中連携」「学びの場の見直し」を３本の柱とするプロジェクトチーム「まなプロ」を立ち上げ、「自己肯定感の醸成」を図り「誰にも居場所がある学校づくり」の実践に踏み出した波田中学校。学校に伺い、３本の柱のチームリーダーの藤原先生、矢島先生、宮城先生に、１学期の歩みを振り返り、お話をお聴きしました。

藤原先生　宮城先生　矢島先生

お互いの授業を見合い学び合う教師集団に

■「授業の充実」では、研究通信「PLUS ONE（プラスワン）」を発行し、「突撃！『先生の授業を見せてください！』」特集を定期的に組み、私が先生方の授業を参観し「学ばせていただいた点や工夫されている点」などを紹介しています。見せていただいた先生方それぞれよく工夫されていて、本当に参考になります。通信を読んだ先生方から「先生の数学の授業をみたい」と言われ、７月に授業を公開しました。「授業の充実」の一つの柱である「協働的な学び、対話を重視した学び」を取り入れ、少しでもよいので見に来てくださいと呼びかけたら、15 人以上の先生方が参観に来ました。先日も社会科の教育課程の授業（９月５日実施）に向けて、「模擬授業やるので、他教科の視点からご意見をください」と呼びかけると、20 名以上の先生方が駆けつけ生徒役になり、「導入時に、今まで授業ごとに作成してきたフラッシュカードを黒板に提示すると、生徒が今までの学習を想起しやすい」などの貴重なご意見をいただきました。「学び合う教師集団」に近づけるように、「子どもが学び『できた』を実感する授業」を目指し、教科を超えた授業づくり・授業研究の輪を広げていきたいです。

協働的な学びを取り入れた実践

それぞれの子どもに応じた居場所づくりを

■「小中連携」では、中１ギャップを軽減し、一人一人の実情に応じた柔軟な指導体制の仕組みを整えたいと考えています。中学１年生を対象に、「６年生の３学期の頃を思い出し、中学校進学にあたり不安だったことは何か」尋ねると、８割の生徒が「勉強のこと（82%）」を挙げていました。「入学して１学期が過ぎ、今不安なこと」を尋ねると、やはり「勉強のこと（82%）」を挙げています。定期テストの内容の難しさを感じたのか、勉強に対する不安感は変わらず高いことがわかりました。勉強の不安感を解消し、その子に応じた居場所づくりのためにも「授業の充実」が大切になるのではないかと思います。中学進学時の不安を解消するために、７月に波田小学校の６年生が中学校の授業を参観する機会を設けました。２学期、３学期も実施し、中学校の様子を知り、中学校に対する不安が軽減する機会になればと願っています。

■「学びの場の見直し」では、「相談室」の在り方を検討し、「長い目でみて社会的自立を目指していく場所」として、「ここにいていいんだよ」という安心していられる居場所となることを全職員で共有したいと考えています。そのために、相談室からのメッセージを先生方に発信していく予定です。特別支援学級とも連携し、一人ひとりの子どもに合った支援計画を作成し、それを職員で共有し、その子にとって「最適な学びの場」となるように努力してきたいです。相談室がどの子にとっても安心していられる居場所となるよう「学びの場を見直し」、さらに「あかり教室（松本市の教育支援センター）」とも、５月に実施したりんご摘果作業のような共同活動を継続し、その充実も図っていけたらと考えています。